



# 夏 | 朝顔



黒枝花

小さい頃種を撒いた朝顔の蔓は、裏庭の塀を埋め尽くしていた。そしてなぜか10月頃までは咲き誇り続けるのだ。弱くて儂いというこの花は、とてもとてもそうとは思えぬほどに食欲に、繁殖し続けていた。

勝手口から緑の壁を見ていて、あそこに埋まって一晩もいれば、あの蔓にからまるのだろうかと考えた。実際にやってみたことなどもちろんない。ただなんでもない好奇心が、いつもいつも心のどこかで疼いている。

浴衣の季節になった。母が呉服屋を呼び浴衣を誂えることになった。

年頃の娘の着物になど興味はないとばかりの無反応も、意に介さず次々に呉服屋は反物を広げ、首元にあてる。首が細くて長いからとか色白だからとか誰にでも言っていそうな世辞を並べ立てて、この染めはとか安いものとは違って、などつまらなくもない蘊蓄を語り続けられる。

「ああ、そうだ。うちの息子がですね。ええ、染物をやるようになったんですよ」と呉服屋は言った。

その息子は、まだ若いようだ。父親の後ろで、反物を差し出したりしていた。彼はそう言われると、無表情で頭を下げた。

「いや染物をやるとか……まだまだこれから修行しなければいけないんですけどね」どうやら父親のほうで息子のこれからの胸躍らせているようだ。ひきかえ当の息子は目を伏せたまま、微動だにしない。

本当なら、こんな、初めて会ったような人のことには興味がないのだ。それなのに母は呉服屋の話に耳を傾け、染物のことなどそんなにもわからないのに呉服屋の息子へと他愛もない質問を投げかける。

「それであなた、何番目のぼっちゃんでしたっけ？ お名前は」「三男でございます」「ああ、じゃあ達也さんね」まあ無口な男だ。答えはすべて親父がする。自分は少し頭を下げるだけだ。「お母さん」ちょっとはばかりにいきます、とあちらを指差し席を後にした。

誰も頼んでいないのに、あんなに大仰にこんな小娘のたかが浴衣を、と首を右に左に傾げながら廊下を渡る。今は洋服のが楽だしなんといってもスタイルがよく見える。

中原淳一のイラストみたいに、末広がりのスカートで、ちょっと高めのヒールで、小ぶりのバッグで、というほうが断然街ではおしゃれなのだ。むしろそっちを買ってくれたほうがよっぽどうれしいのに、と口を尖らせた。旧い家なものだから、髪も切るなど言われたけれどこればかりはやってしまえばおしまいだ、と思い切り短髪にしてやった。美容室から帰ると父はまるで別の生き物を見るような目で見たものだ。

そのまま自室へ帰ってやろうと思ったのだった。それいゆを読むのだ。そうして、すぐに時間は経ったはずだが屋敷の女主人はおしゃべりに夢中なようで呼びに来さえしなかった。行儀が悪いと言われながら直らない、床に寝転んで雑誌を読んでいる間にうたた寝していた。

ふと目が覚めて、呉服屋ももうそろそろ帰る頃だろうと、挨拶くらいはしなくてはと起き上がった。

また廊下を戻っていると、裏庭に呉服屋の息子が立ち尽くしているのを見た。朝顔を見ているようだ。

「何か？」

「あ、いや。えらく茂っているなと」突然声をかけられて、驚いたようだ。

「小学校の課題で、朝顔したでしょ。その種をそこらへんにばら撒いたらこうなったの。何年経っても枯れやしません」

あまりしゃべらないと思っていたのが、思わず声を聞けたものだからつい饒舌になっていた。すると彼、達也の手にはすでに萎んだ朝顔の花がいくつかあった。

「それ、どうするんです？」

「はい、これは色が出ますから、ちょっと頂いて遊んでみようかと」

「へえ」そういえば色水と言って遊んでいたなと思い出した。

「ちゃんと咲いたらどんな色ですか」

「紫です。いや、青かしら。ちょっと光っているような色です」

「へえ」

これは染料になるのかしら？と尋ねると絵くらいは書けるのじゃないでしょうかという。

「じゃあいくらきれいでも」花を摘めばいいのではないのね、と納得した。

「お嬢様は着物はお嫌いですか」

「澄子です」

お嬢様、などという柄ではない。彼、達也の目をまっすぐに見てきっぱりと名乗った。達也は少し怯んだようだ。

お互いに、親同士のおしゃべりに辟易して部屋を飛び出したのだとなんとなくわかった。性質が似ているのだと思った。

「好きでも嫌いでもないんです。でも今は流行らないから」

そこまで言って、口元を抑えた。呉服屋の前で流行らないなんて。「はは、確かに」青年らしい朗らかな笑いだった。さきほど応接間にいたときのあの仏頂面とは別人のようだ。

「よろしかったら、午前に花が咲いてるときにいらして。今はこんなですけど、朝は見事なんですよ」

さっきの非礼を詫びるかのように、今度は少し控えめだった。こんな簡単な草花に興味があるのだったらそれでなんとか機嫌をとれればと思ったのだ。

「それはありがたい。寄らせていただきます」

その後澄子は達也が訪ねてくるのを待った。毎朝裏庭や門をうろついた。3日ほどしても訪問は無かった。1週間を過ぎてあきらめて泣いた。

さらにしばらくして呉服屋の使いが仕立てた浴衣を届けに来た。母はこんなの頼んじゃいませんよと追い返そうとしたが、うちの達也さんからなんです、お嬢様にとってだけ言われて来たん

です、と騒いだ。それで澄子は玄関へ出て受け取った。畳紙をほどくと白地に鮮やかな朝顔が描かれた浴衣だった。達也の最初の仕事だと言われた。

澄子は、今まで焦がれて苦しんでいたことなど忘れた。

描かれた朝顔の色は裏庭の朝顔そのままだった。

この体に朝顔がからまって咲けば面白いと考えていた。それを彼が叶えてくれた。苦しかったが、あの蔓にからまるには、一晩じゃ足りなかったのだ。

夏 | 朝顔

<http://p.booklog.jp/book/58120>

著者：黒枝花

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kuroehana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58120>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58120>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ